

君の目をぬく徒者の果を何れも見物仕候へとて、爰に捨置る、故往來の上下見物す。惜但馬を戀慕せし女房及び一味の女中四五人、露地の内にしがり置れ、官崎藏人奉りて、竹の筒にて眼を打出し、其後殺害被仰付。但馬家禮覺有之者共は、眠近に召出されたり。是狐のわざと聞えけりと云々。武家閑談記には、太田但馬守を殺害の事、利長が妾の方へ太田密通し夜毎に忍び來るを、利長見届て從臣に申付害する也。是但馬守野狐を狩つて狐の子を殺す。其母狐是を恨て、彼妾のもとへ利長來臨の時、但馬と化けて忍びける跡を三度見せしむ。故に利長怒て是を殺害せしむと云傳ふ。併し是は但馬守を殺害せしむる種の口上也。利長程の奇才にて、かゝる人を我の怒を以て殺すべき儀にあらず。實は但馬守武功の者につき、結城中納言秀康卿彼を招かせ給ふ故に、但馬守も彼方へ可參由なり。利長是を惜むといへども、是加州を立退の志あり。彼を遣す間敷とすれば鬪靜の儀に及ぶ。指遣さば殘念の至り。是を咎め即刻殺害せしむ。折節太田が狩に出で、野狐を多く殺せし事有しかば、幸に是に詫して、狐の恨を以て如斯との沙汰に及び、深く

言を秘せりといへり。三州志變餘考の自註にも、本朝武林傳に、但馬殺害に値ふ者は、曾て狐兒を殺す。狐父怒り去る。而して但馬に化し、公の嬖妾に姦通の妖貌をなす事三度なるにより、公怒て如此なすと刊行す。怪説最も不足取といへども、今世此説傳播爲市虎。追考するに、一書に、但馬武名世上に甚だ高く、此の頃徳川内府を始め、諸侯皆我が公の家に但馬あるを憚り、瑞龍公浪華に到れば、先づ但馬の安否を質問あるゆゑ、公も面倒に思ひ給ふ。然るに此の度殺害の事關東へ聞ゆれば、内府團扇しけるが之を聞き喜び、三たび踊躍し給ふとぞ。平次按ずるに、彼の村井長明が象賢紀略に、第一は御手かけ衆おいまをはじめ、中使彼は五人目をぬかせられ云々。と載せたる其の主意は判然ならねど、此の記文に據れば、姦通やうの事狐のわざかは知らねど實記なるべし。然るを武家閑談記に、右は殺害の種の口上とて議論を記載し、三州志にも、怪説最も不足取といへるもの、皆後人の推説といふべし。聞見雜錄に、但馬を御成敗の事五月十四日朝也。御城鶴丸にて被仰付。とあり。三壺記等に、五月四日とすれど、此は十、

字を脱せしものなるべし。關屋政春古兵談に、利長卿は御長刀の鞘を御はづし御出被成、主の目を閉まし不届なる奴と被仰、長刀の石突にて但馬を突かせ給へば、其の時物はいはず、かぶりをふりたりと。又云ふ。其所へ篠原出羽守來り、見苦敷とて羽織を脱ぎて死骸に掛けたり。一段おとなしく見たりといへり。

○本多安房守邸地

元祖安房守政重、慶長十六年吾が藩へ再勤の初めは、小立野石引町波着寺の地に居邸を賜ひたるよし、可觀小説に見たり。然れば其の後太田但馬守の舊第地を賜はりたりと聞ゆ。さて夫れより歴代此の地に居館せし處、明治二十年十一月舊藩主慶寧卿城地を退去し、本多政以の居館を借上げ、此の邸宅を假に居室となし給ふに依り、本多政以は下邸へ移住しける處、同四年八月慶寧卿東京へ移住し給ふに依つて、其の後家屋を毀ち、邸地はそのまゝ、本多氏の所有となしける處、明治十九年五月陸軍省鎮臺營所の御用地と成りたり。

○本多安房守政重傳

元祖安房守政重は、佐渡守正信の二男也。初め徳川家康、秀忠兩公に奉仕し、慶長二年武州江戸に於て岡部庄八と口論せし處、戸田帶刀政重に心を合はせ、庄八を誘引せし途中にて、政重庄八を殺害す。庄八は、秀忠公の乳母の子にて、井上河内守の伯父なり。于時政重十八歳。此の時徳川家の譜代倉橋長右衛門の養子と成り、倉橋長三郎と稱す。其の夜江戸を立ち退き、親兄弟も行方を不知。帶刀も同やう立ち退き、淺野紀伊守に奉公し、名を意春と號す。是戸田采女の伯父也。政重半年許伊勢國山田に居たる處に、大谷刑部少輔の招きに依つて出京す。慶長四年備前中納言秀家の招きに應じ、二萬石を賜はり、正木左兵衛と稱す。于時二十歳也。翌五年宇喜多秀家卿、石田治部少輔に與し、伏見城を取巻かれけり。此の時追手の門にて鎧を合はせ高名す。宇喜多殿より自筆の感狀を賜はりたり。關ヶ原合戦に宇喜多殿の人数を明石掃部と兩人して下知すべき旨命ぜられ、井伊掃部の勢と馬上にて鎧を合はせて高名し、宇喜多殿存命にて遁れ給ふよし承り届け、關ヶ原を退去す。其の後薩州より上京のよし、政重藩に聞之、急速上京し、若し